

乳幼児の意識についての他者関係

—経験科学と相互主観性理論の架橋を目指して—

教育創発学コース 大塚 類

Development of infant's consciousness through relationships with others

—For the purpose of bridging the gap between empirical science and intersubjectivity theory—

Rui OTSUKA

This paper aims to offer a new perspective on the relationship between infants and their parents in early infancy, based on the knowledge of empirical sciences and intersubjectivity theory. In empirical sciences, researchers specifically and vividly describe the relationships between infants and their parents, and depict the process of the formation of a child's ego. However, they do not clarify how such a relationship and process become possible. On the other hand, in intersubjectivity theory, phenomenologists clarify the relationship between a child and his world (his parents) and the process of the formation of a child's ego, by tracing the genesis of the consciousness in the transcendental dimension. However, such phenomenologists do not sufficiently clarify how the consciousness of a co-subject with anonymous others and anonymous inter-embodiment support our common life. Considering such insufficiencies, this paper offers the possibility of the elucidation of human behavior and human relationships through empirical analysis.

目次

はじめに

第一章 経験科学における子ども—養育者関係

- A ウィニコットにおける養育者の関与の重要性
- B サリヴァンにおける感情の絆
- C 鯨岡における人生初期の関係発達

第二章 現象学における自己と他者の発生

- A 谷における他者構成の三つの層
- B 山口における匿名的な間身体性
- C ヘルトにおける匿名的な他者との共同主観

おわりに

はじめに

児童虐待や不登校や非行といった、子どもにまつわる諸問題が取り上げられる際、多くの場合、当の子ども¹の生育歴や養育環境に注目が向けられ、家庭での十分な養育の重要性が語られる。しかも、様々な研究領域において、乳幼児期の養育環境が、その後の子どもの成長や他者関係に大きな意味や意義を備えているこ

とが指摘されていることだけでなく、「三つ子の魂百まで」という諺や、いわゆる三歳児神話が広く一般に知られていること等からすれば、子どもの健やかな成長のためには家庭での養育が重要である、という考えが、自明なこととして我々に浸透している、とさえいえる。そもそも一般的に、客観的な学問の知見や成果は、日常生活における我々の経験や判断や考え方に浸透し、それらを少なからず規定している。さらには、こうして規定された我々の経験等が、学問そのものに見合ったものとなる、とさえいえるであろう。全く同様のことは、人生初期の子ども—養育者関係を考える際にもいえるはずである。そこで本稿では、精神分析理論や関係発達論といった経験科学の知見と、現象学における相互主観性理論とを架橋することにより、人生初期の子ども—養育者関係を捉え直す際の新たな視点を示すことを目指したい。

第一章 経験科学における子ども—養育者関係

本章では、児童や青年の精神分析家として、発達心理学や教育学等多方面に影響を与えたD. W. ウィニ

コット、臨床医として統合失調症の治療に貢献した H. S. サリヴァン、関係発達という観点から母子の相互理解について考察している鯨岡峻による考察を手がかりとして、こうした経験的な診察や観察に基づき、人生初期の子ども－養育者関係がいかに捉えられてきたのかを考察したい。ウィニコットは、母親の役割に着目し、母親による乳児への傾倒的な関与や、乳児の自我の発達における連続した養育の重要性を明らかにしている。他方、サリヴァンは、乳幼児に備わる養育者との結合関係を創り出す能力、という観点から、人生初期の子ども－養育者関係について考察している。しかし、サリヴァンにおいては、こうした能力に支えられた子ども－養育者関係と乳幼児の自我の発達が考察されている一方で、この能力が乳児にそもそも備わっているのか、あるいは、養育者との関わり合いのなかで育まれていくのかが、明らかにされていない。養育者との関係における乳児の能力の伸長や展開という観点から、母子の相互理解を実際に観察し、考察しているのが、鯨岡である。これら三つの研究は、養育者の側、子どもの側、両者の相互理解からなされているため、子どもと養育者との関係を捉える際に必要な三つの観点を、それぞれ代表しうる、といえる。

A ウィニコットにおける養育者の関与の重要性

ウィニコットは、乳児期初期を、「乳児が母親の育児に支えられてはじめて存在し(exist)、それと一緒に一つ単位(unit)を形成する時期」(ウィニコット1977, 39頁; p.42)、と捉えている。母子のこうした一体的な関係を、ウィニコットは、「抱えること(holding)」と表現する。ウィニコット自身が述べているように、この語は、母親が子どもを実際に抱くことだけではなく、子どもに対して「環境から与えられるすべての供給を意味させるために使われている」(同, 41頁; p.43)。このように乳児期初期において、乳児は、母親の傾倒的な関与によって抱きかかえられ、「母親でもあり乳児でもあり、母親と乳児が混じった領域」(ウィニコット2005, 206頁)を、すなわち、自他の未分化な状態を生きている、とされる。では、ウィニコットにおいて、子どもの人格の統合や自我の確立はいかにして生じる、とされているのであろうか。

ウィニコットは、母親がなすあらゆること、例えば、乳児を抱く、寝かす、授乳する等々が、「幼児の人格統合への性向の初期段階や自我の構造化の開始を促す」(ウィニコット1977, 75頁; p.70)、と述べている。あ

るいは、「母親からうける育児」によって、幼児は独自の存在をもつことができ、存在の連続性とでも呼べるものを形成しはじめ、「この存在の連続性を基礎にして、生得的な潜在力は次第におおのの幼児のなかで芽を出し始める」(同, 55頁; p.54)、とも述べている。すなわち、母親による適切で連続的な関わりが、乳児が自分の存在の連続性を実感し、自己を形成することに寄与しているのである。こうした連続性に支えられ、肯定的な体験を積み重ねることにより、幼児においては、「母親が状況を抱えているという体験は自己の一部となり、自我に同化されるようになる」(ウィニコット2005, 325頁)。このようにして、「自我を支える環境[としての母親]は、[子ども]個人の人格のなかに取り入れられ、組み込まれる」(ウィニコット1977, 31頁; p.36,〔 〕内引用者。以下同様)ことになり、幼児は、自己の内部に「取り入れられた自我支持的母親を得」(ウィニコット2005, 136頁)、確固とした自我を形成する。すなわち、乳児が母親を自己の内部に取り込むという仕方で、乳児の自我が形成されることになる。

以上で考察したように、ウィニコットは、母親の傾倒的な関与によって成立する母子の一体的な関係をかなり重要視すると同時に、こうした関係が、その後の子どもの成長に与える影響の大きさを、かなり断定的な言葉で論じている。例えば、ウィニコットは、子どもの「発達にはほどよい環境があるかないかに左右され」、「赤ん坊の研究を遡れば遡るほど、ほど良い母親としての世話がなければ発達の初期段階は生じないことが明らかになる」(同, 80頁; p.74)、とさえ主張する。あるいは、「精神病ではない、または精神病(分裂病)になりそうにないという意味での個人の精神的健康は、それがうまくいっているときはほとんど気づかれずに済んでいるが、出生前の身体的供給との連続である母親の育児がその基盤になって」おり、「この環境からの供給はまた、(幼児にとって)静かではあるが、決定的に重要な自我の支持となる」(同, 48頁; p.49, ()内原文。以下同様)、とも述べている。また、上述したように、ウィニコットにおいては、母親を自己へと取り込むことによって乳児の自我が確立する、とみなされているため、乳児の自我の強さや弱さは、「現実の母親と、幼児が自分から母親を分離する以前の最初の時期に幼児の切実な絶対的依存を満たす彼女の能力とによって決まってくる」(同, 58頁; pp.56-57)、とされることになる。

ウィニコットによる以上の考察においては、乳児期

における母親の関与の重要性が際立たせられている。しかし他方で、ウィニコットにおいては、母親に注目しすぎるあまり、一体的な関わりの手相手である乳幼児の在り方や、子どもが母親に与える影響といった、相互作用としての母子の一体的な関係における子どもに焦点を当てた具体的な記述がほとんど見受けられない。他方、ウィニコットとは異なり、人生初期の子ども－養育者関係における子どもの在り方と、子どもに備わる能力に注目しているのが、サリヴァンである。

B サリヴァンにおける感情の絆

サリヴァンによれば、幼児は、「幼児にとって重要な或るおとなと一種特別な結合関係」を創り出す(サリヴァン1976, 27頁; p.17), とされる。こうした結合関係を可能にしているのが、幼児と幼児にとって重要なおとなとの間に存在する、「感情の絆(emotional linkage)」(同所; p.16)である。こうした感情の絆によって、乳幼児と養育者との関係においては、乳幼児が「感情表現についての理解の兆候をみせるはるかに以前から、こうした感情の伝染、あるいは感情の交わり(communion)の存在する証拠がある」(同所; p.17), とサリヴァンはいう。例えば、授乳された子どもが満足そうな表情を示し、両親がその表情を見て喜ぶ際には、感情移入の絆(empathic linkage)を介して、すなわち、両者の関係を支える「一種独特の感情の絆」を介して、子どもの表情に対する両親の肯定的な反応が、子どもに肯定的な感覚を伝達することになる(cf. 同所; *ibid.*)。他方、感情移入の絆は、周囲の他者からの否定や拒絶といった、「有害な情緒」をも子どもに伝達する(cf. 同, 109頁; p.89)。例えば、サリヴァンによれば、子どもは、自分の言動に対する養育者からの「不承認の気配を、感情移入の絆を媒介として察知する」(同, 30頁; p.20)。同様にして、子どもの言動を咎める際の養育者の身振りは、例えば、しかめ面や語調等は、感情移入の絆を介して子どもに感知され、「自分の安全が脅かされているという感じを、[子どものなかに]喚起する」(同, 110頁; pp.89-90)。サリヴァンによれば、こうした体験を積み重ねるなかで、乳幼児が、「養育者の承認は得られないまでも、せめて、不承認の原因とならないような行為をしようと心がけるところから自己(the self)が誕生する」(同所; *ibid.*)、とされる。

このようにサリヴァンにおいて、子どもは、感情の絆あるいは感情移入の絆を介して、周囲にいる他者の

感情や気配や情緒を、受動的に感知し、それに基づき自分の在り方を統制しようとするような、意志の主体として捉えられている。したがって、人生初期の子ども－養育者関係の養育者に焦点を当てたウィニコットとは異なり、サリヴァンの考察は、子どもに焦点を当てたものとなっている。

しかし他方で、サリヴァン自身は述べていないが、養育者からの不承認といったいわゆる否定的な感覚だけでなく、感情移入の絆によって伝達される肯定的な感覚もまた、子どもの自己の形成やその後の子どもの在り方に影響を与えている、と考えられる。というのも、「自分以外の人間のなかに発見できるものは、実は自己のなかにあるものだけ」であり、それゆえ、「愛を知らずに育った不幸せな子どもの場合、その自己体勢(self dynamism)は自分以外の人間の欠点を見つける能力に優れているだろう」(同, 32頁; p.22), という記述からは、感情移入の絆によって取り込まれた他者の感情や情緒が、サリヴァンにおいても、子ども自身を形成する要素となっていることが窺えるからである。そうである以上、子どもの自我の形成においては、やはり、養育者による関与の適切さや充分さが重要な意味を持っている、とみなしうることになる。しかし、サリヴァン自身は、子どもに対する養育者の関与の在り方やその意味について、ほとんど考察していない。また、子どもと養育者の結合関係は「すでに誕生の時から認められる」(同, 26頁; p.16), という記述からすると、感情移入の絆は乳児に生得的に備わっている、とサリヴァンがみなしているように思われる。しかし、重要なおとなとの間で感情移入の絆が成立する以上、乳児において、他者との感情の交わりが、刺激に対する反応のように誰とでも起こるわけではないはずである。このようにサリヴァンにおいては、感情移入の絆が乳児にそもそも備わっているのか、あるいは、養育者との関わり合いのなかで育まれていくのかが明確ではない。こうした観点から、サリヴァンが感情の絆と表現する母子の相互理解を考察しているのが、鯨岡である。

C 鯨岡における人生初期の関係発達

鯨岡は、乳児期初期からの子どもと養育者との関わり合いを、独特の仕方でも「参加観察」することにより、上述したウィニコットのいう母子の一体的な関係が最初から成立しているわけではない、という立場をとる。例えば、鯨岡は、生後1～2ヶ月の乳児の在り方に、

「母親とは異なる一個の『自己』であることの原初の形」を、すなわち、「欲求の主体」あるいは「情動表出の主体」(鯨岡1999b, 100頁)をみている。同様に、関わり合いの相手である「母親が子どもにおのれを重ね合わせ、成り込む場合でも、完全に子どもに一体化することなどあり得ない」(同, 101頁), と述べている¹⁾。しかし他方で、鯨岡は、子どもと養育者がそれぞれ切り離されているのではなく、両者の自己性は、互いに「比較的容易に合体したり成り込んだりすることが可能なような、開かれた自己性」となっており、「これら二つの開かれた自己性を繋ぎ合わせるのが、広義の情動過程の同型性、つまり情動通底性」(同所)である、と述べている。この情動通底性とは、上述したサリヴァンのいう感情の絆と同様の働きを備えている、とみなしうる。

鯨岡によれば、生後3ヶ月になると、乳児と母親「二人が微笑み合っているという行動上の相互作用よりも、むしろ二人のあいだの気持ちの繋がり、あるいは二人のあいだで一つの気分が共有されていることが強く印象付けられる」(同, 118頁)ようになる、とされる。こうした母子の在り方は、「『一体感』という表現以上でも以下でもない」(同, 119頁), と鯨岡はいう。しかし、鯨岡によれば、この一体感という言葉は、母子一体という言葉に含意されるような、「両者が完全に融合して、自他の区別を全く欠いた状態」ではなく、「それぞれに相手をはみ出す部分を持ちながらも、しかし『ここ』から『そこ』へとさっとでかけてそこで重なる、あるいはそこに『くっつく』という」状態を表現している(同所), とされる。つまり、乳児と養育者は、自他の未分化な状態を生きているのではなく、いつでも一体となれるような、いわば開かれた個として存在していることになる。そうであるからこそ、鯨岡は、「乳児の側の個体能力の伸長と養育者の養育的関与とが微妙に絡み合い、二者間で様々な情動(広義や狭義の情動)が共有されることを通して、次第に一体感や相互的な成り込みを伴う共生的な関係に移行する」(同, 122頁)と、換言すれば、「3ヶ月間暮らしを共にしてきた一組の子どもと養育者が、ようやく文字通りの一体感や共生的関係を築き上げ」(同, 120頁)る、と述べている。

このように鯨岡は、サリヴァンと同様に、個や主体として子どもを捉え、子どもと養育者を繋ぐ情動や感情の絆を捉えながらも、関係発達という観点から、子どもの自我や、子どもと養育者の情動の絆や、両者の一体的な関係さえもが、養育者の傾倒的な関与も含め

た子ども-養育者関係のなかで育まれる、という立場を明確にしている。鯨岡における以上の考察においては、鯨岡自身の観察や体験に基づく、人生初期の母子関係の在り方が生き生きと描き出されている。しかし他方で、鯨岡においては、子どもや養育者が、情動通底性を介して情動を共有し合っていることを、経験的な観点から描き出せても、例えば、情動通底性を両者が生きられるのはどうしてなのか、子どもは情動通底性をどのように自分のものとしていくのか、明らかにされていない。

以上で3人の研究者に定位することにより、養育者の傾倒的な関与、子どもに備わる能力、両者の関係の発達、という観点から、人生初期における子ども-養育者関係を捉え直すことができた。と同時に、経験的な次元における母子関係の在り方や、この関係や養育環境が、3人においては、子どもの自己形成に大きな影響を与える、とされていることが改めて示された。しかし、上述したように、これらの考察においては、経験的に捉えられる関係を基づけている子どもと養育者の意識の在り方が、解明されているとはいえない。他方、次章で考察することになる相互主観性理論においては、例えば、人生初期の子どもと養育者との一体的な関係は、自我として目覚める前という意味で先-自我的(Vor-Ichlich)な次元における、自己と他者の癒合的な等根源性の領域として解明されている。また、「生得的な潜在力は次第におのおのの幼児のなかで芽を出し始める」、というウィニコットの記述は、先自我が目覚めた確固たる自我となっていく発生的な過程として、考察されている。あるいは、サリヴァンが「感情移入の絆」と表現し、鯨岡が「情動通底性」と名づけているところの、自己と他者とが繋がり合っている在り方は、先自我的な次元においてだけでなく、自我の成立以後も働き続け、我々の他者理解を可能にしている「間身体性の層」、または、自他の癒合的な状態に基づく「原初の相互主観性」と捉えられ、解明されている。このように、発達途上にある子どもの意識を解明することと、相互主観性理論における意識の解明とその成果とは、非常に密接に結びついている、と考えられる。そこで次章では、子どもの意識の発達と、人生初期の子ども-養育者関係とが、相互主観性理論においてどのように解明されているのかを考察したい。

第二章 現象学における自己と他者の発生

本章では、まず、自己と他者と世界の生成について

解明している谷徹、および、自他の区別の根源的発生を解明している山口一郎の思索に基づき、彼らが人生初期の子どもの意識の発達をいかに捉えているのかを考察したい。谷は、先自我的な次元における自他の未分化な癒合状態から、自我と他者と相互主観的な世界が発生していく過程を、三つの層に分けて詳細に論じている。山口もまた、自他の癒合状態に着目しているが、「匿名的な間身体性」という独自の観点から、自我の成立過程と、自我の成立以降の他者理解の在り方との関係について論じている。しかも、両者の考察を先取りすれば、両者においては、先自我的な次元における自他の癒合状態が、自他の分離以後の我々の相互主観的な意識を基づけている、とみなされている。また、第一章で考察された経験科学の知見においても、子どもや成人の経験的な在り方に基づき、人生初期における子ども－養育者関係がその後の子どもの在り方に与える影響の大きさが論じられていた。このように、人生初期の子ども－養育者関係の痕跡や影響が、自我の成立以降も何らかの在り方で残り続け働き続けると考えられるが、それが具体的にどのような在り方なのかは、谷や山口においても十分に考察されているわけではない。それゆえ、最後に、他者経験の主題性と非主題性との超越論的基礎づけ連関という観点から、意識一般における他者経験について論じているヘルトの思索について考察したい。というのも、第一章で考察された子ども－養育者関係や、これから考察される谷と山口における自己と他者との関係も、ヘルトのいう「匿名的な他者との共同主観」という観点から捉え直すことができると同時に、谷と山口の論に含まれている問題点を、ヘルトの論によって解消できる、と考えるからである。

A 谷における他者構成の三つの層

谷は、フッサールにおける発生的な他者構成を、自他の癒合的な共存状態が生じている深層、「異他性との遭遇」を契機として「『私』の個別化の主題化」(谷1998, 640頁)、すなわち自我の形成と自他の区別が生起する中層、そして、「唯一の世界が最終構成される」(同, 600頁)表層という三つの層に分けて、詳細に解明している²⁾。

根源的な層である深層においては、自我は成立しておらず、したがって自他の区別のない「先自我的・没我的な事態」(同, 616頁)が生じている、と谷はいう。こうした深層に対応している先自我は、「超越論的な

子供(幼児・乳児・胎児)」(同, 626頁)とも言い換えられる。谷によれば、こうした深層では、「(唯一の)『エゴ』」のなかで、のちに『母』や『父』として構成されるものの実質と、後に『子供』(『アインツィヒ [= 唯一的]な自我)として構成されるものの実質とが、いわば浸透的・癒着的に」(同, 623頁)共存している、とされる。つまり、谷においては、第一章で考察された人生初期の子ども－養育者関係が、深層における先自我と異他なるものとの未分化な癒合状態として捉え直されている。しかも、サリヴァンや鯨岡において、感情移入の絆や情動通底性を介して、乳児が養育者の感情を捉えている、とみなされていたのと同様、谷においても、こうした「癒合的」かつ「相互浸透(内在)」的な共存状態にあっては、「後に他者の身体として構成されるもの」から「後に自己の身体として構成されるもの」へと、実質が「逆浸透」的に移入している(同, 627頁)、と考えられている。それゆえ、谷によれば、「先自我はまた癒合的共存の意味で相互主観的である」(同, 704頁)、とされる。したがって、深層において生じる上述の逆浸透が、「原初の相互主観性を可能に」(同, 619頁)している、とみなされることになる。

こうした癒合状態において、理解不可能な「<異他世界的なもの>」(同, 636頁)に遭遇することを介して、「それまで無邪気な自明性において広がろうとしていた『われわれ』の世界」に「原切断」(同, 637頁)が生起する。この時、自己と他者との分離が生じ、自我が成立することになる。こうした仕方での自他の分離は、感情移入の絆を介して有害な情緒が感知されることを契機として自我が成立する、とみなすサリヴァンの論と共通点を持っている。しかしここで、構成段階を深層から中層へと移行させる契機であるこの原切断によって、自我が「一瞬、他者との無限大の隔絶」(同, 629頁)を、すなわち、原初の相互主観性の崩壊を体験する、と谷がみなしていることに留意が必要であろう。癒合状態によって支えられていた原初の相互主観性が崩壊し、「世界の相互主観的な唯一性」がなくなってしまうと、「自我と他者の間で、あらゆる意味での『意味』構成の共通性、『存在』構成の共通性」が「失われてしまう」といった可能性が生じてくる」(同所)。それゆえ、こうした事態を避け、「他者との共存と世界の相互主観的な唯一性を同時に保証する」ために、すでに構成の主権を獲得している自我は、今度は「自分の側からの自己移入」(同所)を遂行し、他者との繋がり合いの回復を試みることになる。自己から他者へと向けられたこうした自己移入は、我々が日常的に感情移入と呼ん

でいるところの、「私が他者の立場であるならば」、という仕方での他者理解の在り方である。したがって、乳児が養育者の「不承認の原因とならないような行為をしようと心がける」というサリヴァンの記述は、谷に基づけば、乳児が自分の側からの感情移入によって養育者を理解しようと試みていること、と捉え直すことができる。しかも、谷によれば、この自己移入は、「それ自体、深層の記憶や〔逆浸透的な〕自己移入を前提とし、そこに根をもっている」(同、704頁)、とされる。つまり、深層における自他の癒合的な関係に基づいて、こうした感情移入による他者理解が、我々に可能となっている、とされている。したがって、第一章で考察された経験科学の知見同様、谷においても、人生初期の子ども－養育者関係が、その後の子どもの意識の在り方に重要な役割を果している、とみなされていることになる。

以上の考察に際し、谷は、先自我を「超越論的な子ども」と、そして、深層における世界実質を、後に「父」や「母」として構成されるものと言い換えている。また、谷は、深層における「原初の共存の(触覚的な)実質は、母子の皮膚感覚的な——これは至近距離をも意味する——関係のなかで与えられるように思われる」(同、703頁)、とも述べている。このように谷は、深層における自他の癒合状態を、人生初期の子ども－養育者関係と並行関係にあるとみなした説明を行なっている。こうしたことから、谷による以上の考察は、母子の一体的関係から母子の分離への移行において想定されている事柄の、現象学的説明ともなっている、とみなしうることになる。谷によるこうした考察をふまえたうえで、次に、自己と他者の成立に関する山口の思索をみていきたい。

B 山口における匿名的な間身体性

上述した谷同様、山口もまた、「いまだ覚醒する以前」であり、「いかなる意味での『自我も作動していない』状態を意味する「先自我性」(山口2005, 396頁)を、乳幼児の意識の在り方として説明している。山口によれば、「自分と他人の区別がついていない」(同、401頁)乳幼児は、「内部感覚と外部感覚の区別が成立していない遍身体性、ないし汎身体性」(同、262頁)を生きている、とされる。こうした遍身体性の次元では、すなわち、「匿名的な間身体性の次元」(同、229頁)では、「自我主観と世界客観が対峙する分割が生じうる以前に、意識生と環境世界、先自我と先世界との間」で、

「原交通」(同、230頁)と呼ぶ交流が生じている、とされる。しかも、山口は、この時の世界とは養育者である、とする(同所参照)。それゆえ山口は、この原交通を、「受動的相互主観性の領域」(同、402頁)、と名づけることになる。山口によるこうした考察は、ウィニコットが「抱えること」と表現した母子関係の内実や、サリヴァンの感情移入の絆や鯨岡の情動通底性を、身体の観点から現象学的に捉え直した考察である、とみなしうるであろう。この受動的相互主観性を可能にしている間身体性の次元において、自己と他者は未分化な癒合状態にあるため、自我が「誕生の初めから形成されているわけではない」(同、43頁)、すなわち、養育者との関係のなかで育まれる、という立場を山口はとっている、とみなしうる。

この自我の形成について、乳幼児の発する喃語を手がかりとしながら、山口と共にさらに考察を進めたい。

乳幼児が喃語を発する際には、その子どもの身体に生じる運動感覚や身体感覚と、実際に聞こえる「「声(聴覚)」」(同、183頁)とが対関係をなしている。したがって、乳幼児は、このように身体を働かせればこうした声が聞こえる、という仕方、「漠とした予感」(同、184頁)を持つようになる。他方、母親が子どもの喃語を模倣する時には、子どもにおいて、「「声」の予感は満たされるが」(同所)、その声と対をなして生起するはずの諸身体感覚の予感が満たされないことになる。こうした仕方、「自分」の身体と「他」の身体との」(同、202-203頁)差異が、乳幼児によって「繰り返し経験され」(同、203頁)ることにより、それまで生きられていた匿名的な「間身体性から身体中心化が生成する」(同、202頁)ことになる。こうした自他の身体の差異を繰り返し経験するなかで、乳幼児において、「コントロールできる自分の身体とコントロールできない他者の身体の区別」が「絶対的なもの」(同、203頁)となり、「自我の自我性の生成」(同、396頁)が起こることになる。しかも、山口によれば、以上で概観した自他の癒合的な「領域は、〔成人の意識のなかで〕完全に過去の記憶として現在において機能していないのではなく、生き生きした現在の根底に流れている相互主観性の基底層」として常に働いている(同、396頁)、とされる。したがって、例えば、「『私の痛み』と『他者の痛み』との断絶…は、決して根源的なものではなく、二次的なものにすぎず、本来の『間身体的な痛み』という感覚質に事後的に生成した自我と他我の違いを付加しているにすぎない」(同、263頁)ことになる。つまり、山口自身も述べているように、他者の痛みを実感した

り、笑っている他者の姿を見て、私も愉快さを感じたり、他者の悲しみが私に自然と映ってくる、という仕方、我々が他者を理解できるのは、これら痛みや愉快さや悲しみが、自己と他者に共通の間身体的な感情の層に基づけられているから、ということになる。

以上で考察したように、山口においては、谷よりもさらに具体的に、自他の未分化な癒合状態を生きる先自我と先世界との関係を、人生初期の子ども－養育者関係に置き換えた説明がなされている。ここまでみてきたように、経験科学の知見においても、谷と山口の考察においても、自己と他者の分離以後の自我の意識や在り方そのものにとって、自他の癒合状態における経験が重要な役割を果している、とみなされている。しかし、谷と山口の考察では、相互主観的な意識が、深層における記憶や逆浸透的な自己移入にその根をもっている、あるいは、自他の癒合的な領域が相互主観性の基底層として常に働いている、と記述されていても、具体的にいかなる仕方で根をもっており、いかなる仕方で常に働いているのかが、明示されているわけではない。さらには、後に他者の身体として構成されるものから、後に自己の身体として構成されるものへと実質が逆浸透的に移入する、あるいは、異他世界的なものとの遭遇によってわれわれの世界に原切断が生じる、等々の谷の記述は、我々の日常的な生からはあまりにもかけ離れた抽象的な記述といわざるをえない。また、山口の記述においては、先自我の次元における先世界や環境世界を養育者とみなしたまま、自我と他者の成立について語られており、他者とは異なる世界の成立や在り方に関する考察が充分ではない、といわざるをえない。

そこで以下では、上述した不十分さを解消するために、すでに成立している相互主観的な意識一般の内実に関するヘルトの説明に依拠しながら、人生初期における自他の癒合状態が、意識においてどのように機能し、重要な役割をどのように果しているのかを、考察していきたい。しかも、谷や山口とは異なり、ヘルトは、或る物体を知覚するという具体的な事柄に基づき、自己と他者の世界の同一性の内実や、自己の意識のなかに含まれている他者の機能について、現象学的に説明している。それゆえ、ヘルトの思索を考察することにより、第一章で考察した経験科学における知見と相互主観性における説明との結びつきが、より明確になるはずである。

C ヘルトにおける匿名的な他者との共同主観

ヘルトによれば、日常的な生を営んでいる我々が、「世界は私にとって(“主観的に”)のみならず、端的に(schlechthin)に各人(jedermann)にとっても(“客観的に”), それがあるところのものである(sei)」、という素朴な確信を持つるのは、「或る特定の対象が、私に対してだけでなく他者に対しても、それが私にとって現われているような仕方で自らを示している(sich zeige), という意識」(Held1972, S.26)が遂行されているからである、とされる。しかも、こうした意識の在り方は、各人に対しても同様であるという意味で、「共通に経験された対象を把握しているのは誰なのかが、任意となるような或る態度」(ebd.)によって生じる。では、こうした態度は、いかにして可能となるのであろうか。

例えば、そこに一冊の本がある時、我々は、その本の或る一側面しか実際には見ていないにもかかわらず、側面や背面といった厚みを備えた一冊の本として、その本を知覚する。フッサールの言葉を用いれば、私に実際に見えている側面は直接現前(Präsentation)しているのに対し、他の諸面は間接現前(Appräsentation)されるに留まっている。しかしこの時、私には間接現前されるに留まっているその本の背面は、私と向かい合っただけで座っている他者には、直接現前として現われている。さらに私は、その本を手にとって一周させることにより、その本のあらゆる側面を、時間の流れに沿って、私の直接現前にもたらしうる。このように私は、「或る他者にとっての現われ方の各々を、私にとっての現われ方へと転換する(verwandeln)ことができる」(ebd.)。すなわち、私には、「他者のそのつどの世界把握[=直接現前]を、間接現前という仕方で準現在化する(vergegenwärtigen)[=あたかも現に存在しているかのように意識にもたらす]」(a.a.O., S.27)ことができる。

したがって、ヘルトが指摘しているように、私の遂行する「各々の間接現前はまた、匿名的(anonym)な遂行者を非主題的に共に意識してしまっていること(unthematisches Mitbewußthaben)」(a.a.O., S.28)である、とみなしうる。つまり、我々が、厚みを備えた物体として或る物体を知覚できるだけでなく、さらには、各人にとって現に存在している世界の客観性を確信できるのは、たとえ他者が私の知覚野に存在していないとしても、私の意識が、匿名的な遂行者を非主題的に共に意識してしまっているからである。すなわち、我々

の意識が、こうした匿名的で非主題的な他者との「共同主観(Mitsubjekt)」(a.a.O., S.30)として機能しているからである。ヘルトによれば、こうした共同主観は、「自我とは異他なる第一の者として、すなわち、〔自我にとって〕共通の我々の世界に関わっている異なる機能として、意識され、…了解されている他者」(a.a.O., S.29f.)である、とされる。そして、この他者が、その身体を介して私の知覚世界に現われてくる時には、「異他なる者を受動的に経験している間接現前」を可能ならしめているところの、「こうした〔経験〕遂行において機能している遂行者としての共同主観について、非主題的に意識してしまっていること」と、「共同主観の経験遂行について非主題的に意識してしまっていること」とが、生じることになる(ebd.)。これら非主題的な意識によって、共同主観という「匿名的に共に機能していることを統覚的に主題化すること」(ebd.)が、すなわち、或る特定の他者との出会いや直接的な関わり合いといった、主題的な他者経験が可能となる。つまり、匿名的な共同主観を自らの意識の内に含み込んでいる我々は、非主題的な次元において、常にすでに共同主観を意識してしまっている。しかも、実際に出会われてくる他者は、こうした共同主観が身体を介して私の眼前に現われてきた他者である。このように、我々にとって現実の他者が共同主観であること、そして、我々が、匿名的な共同主観の経験遂行について非主題的な次元ですでに意識してしまっていること、これらに基づいて、我々は、他者と実際に関わり合う際に、その他者の想いや意図を理解し、他者の経験遂行に対して齟齬を感じることなく共同作業を営める、と考えられる。

以上で共に考察したヘルトの解明に従えば、我々の意識が、匿名的な他者との共同主観としての機能を有しているからこそ、我々は、客観的世界とその内部の存在者にリアリティを感じたり、顕在的な他者と何らかの共同作業を遂行しながら、その他者の想い等を捉えたりできる、ということになる。こうした自我の在り方は、「世界を経験しているがゆえに、私の経験は(それゆえに私のいかなる知覚もすでに)、世界〔内の〕客観として他者を含み込むだけでなく、存在に即せば共に妥当している、という仕方、常に共同主観、すなわち共に構成している者としても、他者を含み込んでいる」(Husserl2006, S.394)、というフッサールの言葉や、「現在化作用という相互共在において、私は、他なる自我の共現在をも暗黙のうちに経験している」(Held1966, S.155)、というヘルト自身の記述からも窺

える。しかも、ヘルトによれば、こうした共同主観は、「〔我々の〕意識にとって、受動的で相互主観的な発生を介して、…匿名的に機能するに留まっているものとして親しまれている」(Held1972, S.52)、とされる。

そうである以上、谷や山口によって考察された自他の癒合状態における他者は、他者意識の発生過程についてヘルトによって記述されている意識に含み込まれている、と考えることになる。しかも、ヘルトは、我々が客観的世界を生きられるようになるためには、「少なくとも一人の他者によって私の世界が共に把握されていることを、経験済み(Erfahrung machen)としなければならない」(a.a.O., S.27)、と述べている。この他者とは、乳児が自他の癒合状態を生きることを支えている養育者、と考えるのではないだろうか。そうであるならば、自他の癒合状態から自他が分離する際に、それまでの癒合状態における養育者が、第一の共同主観として子どもの意識に含み込まれる、とみなしうることになる。このことは、第一章で引用したウィニコットが、乳児を支える環境としての母親が取り込まれることによって乳児の自我が成立する、と述べていた事柄とも合致する。さらには、谷や山口によって述べられていた、先自我的な次元における自他の癒合状態は、自他の分離後も根として残る、あるいは、相互主観性の基底層として常に働いているという事態は、ヘルトに即せば、自他の分離と共に我々の意識に含み込まれた共同主観が非主題的に機能し続けていること、と捉え直すことができる。また、サリヴァンや鯨岡が述べていたように、乳幼児を含めた我々が、感情移入や情動通底性を介して他者と想いを通じ合わせるのは、我々も当該の他者も、互いを含めた匿名的な他者との共同主観としての意識を生きているから、とみなしうることになる。

以上で考察したように、ヘルトによる上述の解明は、経験科学において想定されているところの、乳幼児期における自他の一体的な状態にある個々の意識の機能と、その状態から自他の分離への移行の現象学的記述ともなっている。自己と他者の一体的状態と表現される事柄は、現象学の観点から述べれば、乳幼児の意識において自己と他者とが未分化なまま一体となって非主題的に共に機能していることであり、それを基盤として、乳幼児のこうした意識が他者を主題化することになることが、自他の分離と表現される事柄である、とみなしうることになる。しかも、自他の癒合状態においては、自己と他者とがまだ成立しておらず、両者の機能も癒合している以上、ヘルトのいう、「共同

主観の経験遂行について非主題的に意識してしまっていること」と、「こうした〔経験〕遂行において機能している遂行者としての共同主観について、非主題的に意識してしまっていること」とは、明確に分けられない状態にある、と考えられる。そして、自他の分離と軌を一にして、自己の意識にこれら非主題的な機能が含み込まれると同時に、共同主観としての他者が生成し、これら二つの非主題的な意識の区別が生じることになる、と考えられる。

したがって、前章と本章での考察をふまえれば、子どもと養育者の一体的な関係、先自我と世界との癒合的で相互浸透的な共存状態、癒合的で匿名的な間身体性、とそれぞれ表現は違っても、経験科学においても、相互主観性理論においても、自己と他者の一体的状態を経て、我々の意識は匿名的な他者との共同主観となっていく、すなわち、他者の想いを理解したり、他者と共同作業ができるようになっていく、とみなされていることが窺える。あるいは、以上のような自他の癒合状態を経て、我々に元来備わっているとされるこうした意識の機能が、直接的な他者との出会いを介して顕在化される、とみなされていることが窺える。と同時に、こうした意識の機能に基づいて、経験科学で考察されていたような、自我の成立が捉えられることになる、といえる。しかし他方で、ヘルト自身によっては、匿名的な他者との共同主観である意識の存在様式は解明されているが、こうした共同主観としての意識の発生過程や、「他者によって私の世界が共に把握されていることが、いかにして原本的に所与性へと到るのか」(Held1972, S.50)、という問いは、明らかにされていない。

おわりに

第一章で考察された精神分析理論と関係発達論においては、人生初期における子どもと養育者との関係において、両者の間に何が生じており、子どもの自我がどのように形成されるのかが、経験的な次元で明らかにされていた。また、第二章では、自己と他者の形成や、相互主観的な世界や他者理解を可能にしている意識という観点から、自我が形成される以前の次元における、自己と他者との癒合的な在り方と、そこからの自他の分離の過程についての、相互主観性理論の思索が考察された。相互主観性理論においても、こうした過程は、先自我と呼ばれる乳幼児の意識が養育者を含めた周囲世界と自己とを区別し、両者を把握していく

過程として描かれていた。したがって、経験科学と現象学いずれにおいても、人生初期における子どもと養育者との一体的な関係が自明視されているだけでなく、こうした関係が、子どものその後の自己形成や、他者理解や、他者関係の在り方にかなり大きな影響を与えている、と彼らによって想定されていることが示された。また、第二章Cで考察したヘルトの思索に基づくことにより、自己形成や意識の発生をめぐる経験科学や相互主観性理論における不充足さを、「匿名的な他者との共同主観」という観点から明らかにできた。こうしたことから、経験的な子ども－養育者関係の在り方を捉えている経験科学と、この在り方を基づけている意識を、超越論的な次元に遡って解明している現象学とは、相補的な関係にある、とみなしうることになる。事実、第二章で引用した谷や山口は、意識の発生過程の解明に際し、経験科学からの知見を手がかりとしている。しかし、本稿で示したように、人生初期の子ども－養育者関係については、経験科学においても、現象学においても、解明されていない事柄がかなり残されていることも、同時に示されることとなった。

(指導教員 中田基昭教授)

注

- 1) 鯨岡のいう「成り込み」とは、身体の次元で生じる他者把握といえる。鯨岡自身は、「『いつも、すでに』相手に向けられていた当事主体の関心が、いまこの瞬間に相手の身体へと引き寄せられ、『そこ』に凝縮されることにより、私が『ここ』において〔相手の〕『そこ』を生きる」(鯨岡1999a, 34頁)こと、と定義している。成り込みの典型例としては、乳児に離乳食を食べさせようとする母親が、「アーン」と言いながら自分も大きく口を開け、「モグ、モグ、じょうず」と言いながら、自分も口をもぐもぐさせる(鯨岡1997, 107頁参照)、という在り方が挙げられる。
- 2) 谷は、解明の展開における必要から、「意味」という語にアラビア数字の番号をつけ(例えば、①意味というように)、その語が表わす内容を区別している。また、同様の理由から、他者構成の表層と中層と深層に、それぞれ、漢数字の(一)から(三)を当てている。しかし、本稿での引用に際しては、これらの番号を削除することにした。

引用文献

- Held, K. *Lebendige Gegenwart*, Martinus Nijhoff, 1966
 Held, K. *Das Problem der Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie, Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung*, Martinus Nijhoff, 1972
 Husserl, E. *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, Martinus Nijhoff, 1950

- Husserl, E. *Späte Texte über Zeitkonstitution*(1929-1934): *die C-Manuskripte*, Springer, 2006
- 鯨岡峻『原初的コミュニケーションの諸相』, ミネルヴァ書房, 1997
- 鯨岡峻『関係発達論の構築』, ミネルヴァ書房, 1999a
- 鯨岡峻『関係発達論の展開』, ミネルヴァ書房, 1999b
- サリヴァン, H. S. 『現代精神医学の概念』中井久夫他訳, みすず書房, 1976, *Conceptions of modern psychiatry*, Norton, 1953
- 谷徹『意識の自然』, 勁草書房, 1998
- ウイニコット D. W. 『情緒発達の精神分析理論』牛島定信訳, 岩崎学術出版社1977, *The maturational processes and the facilitating environment—Studies in the theory of emotional development*, International Universities Press, 1965
- ウイニコット D. W. 『愛情剥奪と非行』石井久敬他訳, 岩崎学術出版社2005